

# ぶら 探訪

## その十四 深津島山を歩く

講師 田口義之

平成25(2013)年9月8日【土】午前9時スタート



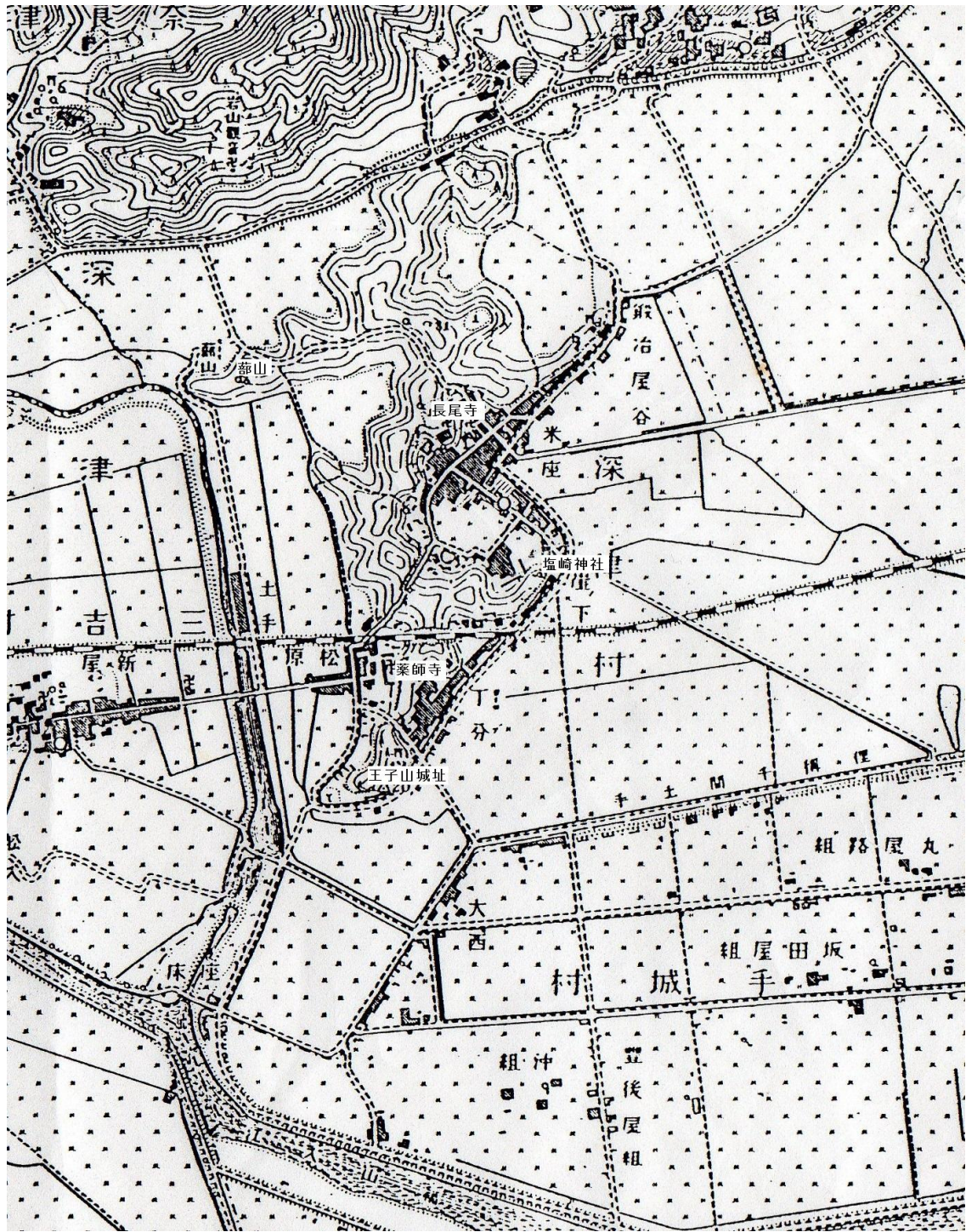
昭和40年頃の深津高地

### 今日の予定

9時出発→薬師寺→王子山→長尾寺→葎山→惣戸神社(11時半解散)



# 備陽史探訪の会



明治30年発行の陸地測量部地形図

## 深津村

福山市東深津町・西深津町・王子町一―二丁目・入船町三丁目

福山城下の東方、深津高地に位置する。深津はその名称の示すように、深く入込んだ津を意味し、古くは現在の深津高地は深く湾入した福山湾内に突出した半島状の丘であり、蔵王山塊の山麓に良港を形成していたと考えられる。「万葉集」巻一に「路の後深津島山暫くも君が目見ねば苦しかりけり」の歌があり、この深津島山は深津高地をさすとされる。少なくとも平安時代には深津高地の両側に遠浅の海岸が形成され人家が存在したことは、平安時代から中世にかけて使用された須臾器や土師器、中世の土器、中国より輸入された磁器を含む貝塚が点在することでも知られる。

戦国時代には深津高地南端の王子山城に長尾主計頭が居城（備後古城記）。將軍足利義昭が毛利氏を頼って鞆に来寓した時、「深津と申所に御館を作り五千石の知行を付させ給」（室町殿日記）と当地に一時住したと伝える。また近世初期には王子山城に毛利元康（元就七男の伝えがある）が在城したらしい（備中府志）。

元和五年（一六一九）の備後国知行帳では二七九石余、元禄一三年（一七〇〇）の備前検地で八六一石余となる。この増加は新田開発によるもので、「福山志科」に「深津ノ近辺元和寛永ノ比マテ渺々タル海ナリ、薬師寺ノ辺ヲ西浜ト云ヒ遠干潟ナリ、蛙石ト云礁アリテ往来ノ船ヲ損スルコト度々ナリ、一丁四方許ノ石ナリシヨシ今八田ノ中ニノコリテ三間四方許ニミユ、形蝦臺ノツクハヘルコトシ、正保年中ニ水野侯千間堤ヲ築テ市村・引野・深津等ノ新田ヲ開カル」とある。文化六年（一八〇九）

頃の反別七五町余、うち畠四二町余、四二三戸・一千六六〇人、牛四七・馬四三（同書）。

神社は前述の新田開発にかかわり水野勝成が社殿を造営、神田五反を寄進したと伝える塩崎神社、足利義昭の霊を祀るといふ三島大明神などがあり、さらに出崎八幡社が蔵の崎の上の丘に祀られるが、蔵之崎は王子山城主毛利元康時代の米蔵の跡と伝え、「当村の詞に他村を在郷といふのは、元康の城下であったためという（備陽六郡志）。寺院は長尾寺・薬師寺のほか、町人の火葬場跡に、念仏寺であった浄土宗の小庵を水野勝種の母月窓院が寺とした専故寺があったが、明治時代移転して廃寺となった。明治三年（一八七〇）戸長石井英太郎が翠松館を長尾寺に創設、翌年これを母体に福山藩最初の啓蒙所が開かれ、同五年校舎を字浜に移転して深津小学校と改名。これは広島県下最初の小学校であった。

なお明治一九年以前、深津沼田・木之端の両村を合併。同四一年、歩兵第四一連隊が福山に移駐すると、深津高地は陸軍の演習地となったが、第二次世界大戦後はここに文化教育施設が多く建てられている。

## 部山

福山市西深津町

蔵王山塊より福山平野に突出する深津高地の一支丘にあたる。現在稲荷大明神境内から西側平坦な台地一帯を称する。部山は「古今六帖」などに詠じられるが、その所在には異説がある。当地には將軍足利義昭が居館を構え、深津御所とも部山御所屋鋪とも称したと伝えられている。

義昭は天正四年（一五七六）二月毛利氏を頼って鞆に到着、公方谷に居館を定めた。同一〇年毛利氏と豊臣秀吉との講和により、京都に帰って幕府を開く希望が絶え、義昭はその後居所を備後国内に転々と移し、

同一五年頃には津之郷に御座所があった（九州御勅座記、九州道の記）。  
葦山居館について「福山志料」は、「葦山にあり、西の方なる平らかなる  
岡これなり」と記し、そのよりどころとして「室町殿日記」の「備後の  
国深津と申所に御館を作り」、「西国太平記」の「備後国深津に御所を  
営」という記事をあげる。両書とも義昭は帰洛後再度備後に下向、隠退  
生活を深津御所で送ったように記している。しかし

天正一六年秀吉に帰洛を許されて帰京後、義昭が再び備後に来住した確  
証はなく、おそらく頼在住中か津之郷在館時に深津にも別邸があったの  
ではないかと推察される。

現在「伝足利義昭居館跡」として市指定史跡。

なお葦山北東の網木にある小丘を三島といい、小社（三島大明神）が  
あって足利義昭の霊を祀るといふ。「西備名区」には三輪大明神とある。

## 長尾寺

福山市東深津町

深津高地の南麓にあり、宝童山普賢院と号し、真言宗大覚寺派。本尊  
観世音菩薩。大同年中（八〇六〜八一〇）弘法大師の開基と伝え、草創  
当時観音寺と称したが、大治二年（一一二七）に崇徳天皇が再建、この  
時普賢院と改めたといふ。崇徳上皇が保元の乱により兼州へ流される途  
中深津に立寄り、市の医王寺に行宮を置いたといふ伝承があり（西備名  
区）、早くより崇徳天皇ゆかりの伝説が生れていたようだ。

現寺号になったのは、戦国時代長尾主計頭隼人が王子山城主として当  
地を支配していたとき、当寺を再建したことが「西備名区」にみえ、そ  
の名をとって寺号としたことが伝えられる。この時本尊の観音を吉津に  
移して一寺を建て観音寺とし、当寺の本尊には普賢菩薩を安置。宝永年

中（一七〇四〜一一）に西中条（福山市神辺町）寒水寺の伝弘法大師作  
の観音を請うて本尊としたと伝える。

## 薬師寺

福山市東深津町

深津高地南端近くの丘上に位置し、王子山福正院と号し、真言宗大覚  
寺派。本尊は薬師如来であるが、「備陽六郡志」は「文禄の頃、此辺は渺々  
たる海なりけるが、海中に光物有、所をさだめず、西入といふ法師小船  
に乗て夜を覗けるに、この光もの次第に近より蛙岩まで来る、西入則舟  
を漕よせみれば薬師の尊像なり、急ぎ取揚置けるに靈験著し」と、海中  
出現を伝えている。

当寺は慶長年中（一五九六〜一六一五）王子山に居城した毛利元康が  
この尊像の奇特を感じ、一字を建立したのに始まるといふ。寛文年中（一  
六六一〜七三）福山藩主水野勝成

が今日のような堂舎を建立し、それまでは草堂であった。

「西備名区」は、当時の住職は暮が好きであったが、遊獵の途次、立寄  
った水野氏の相手をつとめ、取立てられたと伝えるが、江戸初期の彩色  
絵の板襖に水野家紋入りの引手があり、福山城伏見御殿と同一の板襖な  
どを蔵し、水野氏時代建立を物語っている。

以上、平凡社刊『広島県の地名』より

## 王子山城と毛利元康

市街地のど真ん中と言ふ、意外なところにも戦国時代の城塞の跡が残  
っている。東深津町の王子山城跡だ。

国道を福山駅前から東に向かうと、洋服の青山辺りで、左手にコンク

リートの胸壁で塗り固められた低い丘が見える。これが王子山城跡である。

少しややこしいが、天満屋前の市道を東に進み「三枚橋」を渡って突き当たりを右折、更に進むと東西の市道にぶつかり、左手に神社の参道が見える。参道を登れば「王子神社」で、ここが本丸の跡だ。参道の左右、さらに神社から南西に延びる尾根には「曲輪」の跡と思われる平坦地が見られ、ここが確かに城跡であることがわかる。

築城者は容易ならぬ人物だ。「備後古城記」をひも解くと、「深津村 王子山 毛利大蔵大輔元康 毛利元就卿之息 七男 慶長三年」とある。「毛利元就卿」とは、いうまでもなく、あの有名な戦国大名毛利氏の「もとなり」だ。その七男というから、今まで紹介した山城の城主とは格が違つ、しかも、「慶長三年(1598)」と言えば、あの関が原合戦の直前で、時代はもう近世に入っている。

元康は、正しくは毛利元就の八男。永祿十(1567)年、元就71歳の時の子という。はじめ出雲末次城主に任命され「末次」を称したが、天正十三(1585)年、兄の出雲富田月山城主毛利元秋がなくなつたため、兄の跡をついで富田城主となった。

元康が備後に入部したのは天正十九(1591)年、領地替えて備後神辺城主に任命され、備後国安那郡1万88石をはじめ、深津・沼隈郡そのほかで合計2万3828石余を領した。文祿四(1595)年従五位下、任大蔵大輔、堂々たる大名である。

これほどの人物が、何故、当時福山灣に突き出た深津高地の突端に城を築いたのか、証拠は残っているのか…。

まず、「備後古城記」などの地誌は別にすると、元康の子孫に伝わった記録がある。元康の子孫は長州藩毛利家の「一門」として防州厚狭を領

し、「厚狭毛利家」と称された。同家の記録を見ると、元康の所に「後在備後神辺城 或深津城とも云う」とある。更に系図には、元康の嗣子元宣は「備後深津城で誕生」とある。

記録の性質から、深津城云々を捏造する必然性はまったくないから、元康が神辺城から深津王子山に居城を移そうとしたことは事実と考えていい。

神辺から海寄りに城を移そうとした(移した)人物としてまず頭に浮かぶのは水野勝成だ。この福山開祖は以前に述べたように、鞆という瀬戸内海航路の要を押さえるために福山城を築いた。元康も同じである。しかも、元康は勝成と違つて実際に海を渡つて戦つた経験を持つ。文祿慶長の役で、元康は主君毛利輝元の代理として出陣し、大きな手柄を立てた。海上支配の重要性を熟知していたはずだ。

歴史の「もし」を空想するのは楽しい。もし、関が原の合戦がなかったら、福山の歴史はどうなったのか、城は王子山にあり、福山市ではなく「深津市」となっていたかも知れない。

## 部山と足利義昭

市内には、津之郷町の「御殿山」以外に、足利義昭の居館跡と伝わる場所が、もう一ヶ所残っている。西深津町の「部山(しとみやま)」だ。現地を訪ねてみると、神社の境内地となっているが、2段の平坦面からなり、確かに古い屋敷地である。

伝承では、義昭は晩年、ここに屋敷を構え、亡くなったと言ひ、墓も「原」というところにあるという(西備名区)。

「義昭と親しかった連歌師紹巴は、義昭が備後で零落しているのを聞いて、太閤秀吉に取り成した。秀吉も義昭の事を気にかけていたので、毛

利輝元に義昭の世話を命じた。輝元は備後の深津というところに御館を作り、5千石の知行を添えて義昭をもてなした。秀吉はまた田舎暮らしは侘しかりうと、傍で召し使っていた美女を義昭に進呈し、徒然を慰めさせた。(室町殿日記)」

史実の上では、前回述べたように、義昭は天正一五年(一五八七)三月、赤坂で秀吉と面会し、帰京を許された。同年閏五月には、毛利輝元に書状を出し、在国中の礼を述べているから、帰京が確認される。以後、義昭が備後に再度下向したという記録は無い。

深津の葦山が義昭の居館と考えられるようになったのは、次の一文が影響しているのではなからうか…。

「(七月)一五日(宮島を出て)それより備後の津公儀御座所に参上して、一八日朝鞆までこし侍る。(細川幽斎「九州道の記」)」

細川幽斎は、藤孝といい、義昭の將軍就任には一方ならぬ尽力した人物であった。だが、義昭が信長と対立し、その排除を謀るようになると義昭を見限り、信長に付いた。以後、細川氏は織田、豊臣、徳川の世うまく泳ぎ、肥後熊本54万石の大大名として明治維新まで存続した。

しかしながら幽斎は、全く義昭を見捨てたわけではなかった。最後まで室町幕府を背負った名門細川氏として、何くれと面倒を見た。この一文は、幽斎が秀吉に従って九州に下向した際の紀行文で、帰途に津之郷の義昭の御所(公儀御座所)を訪ねたことが分かる。既に義昭は帰京している筈だから、二日も滞在したのは解せないが、或いは義昭帰京後の後始末があったのかも知れない。

「室町殿日記」は、この紀行文に「津公儀御座所」とあるのを「深津」と即断したためであろう。この書物は「日記」とあるが当時のものではなく、江戸時代になって編さんされたものである。著者が備後の事情に

明るかったとは言えない。本来「津之郷」とあるべきを「深津」と誤ったと判断したい。

なお、深津の「葦山」が義昭の居館跡でなかったにしろ、中世にさかのぼる屋敷跡であることは間違いない。江戸時代初期、水野氏の干拓によって周辺が陸化するまで、葦山は深津湾に東から西に突き出た岬であった。この地に海上を監視する「海賊城」が設けられていたことは、大いにありうることである。

以上、田口義之『新びんご今昔物語』(大陽新聞連載)より



深津島山周辺（国土地理院電子地図より）

メモ

森本繁『備後の歴史散策』より



次回の「ぶら探訪」は10月5日（土）9時、広島県立歴史博物館前スタートの  
「福山城の西側を歩く」です。ご期待ください。

 備陽史探訪の会 事務局

〒720 - 0824 福山市多治米町5 - 19 - 8

TEL&FAX 084 - 953 - 6157

E-メール info@bingo-history.net

公式ホームページ

<http://bingo-history.net>